

「来迎院本」の『遊心安楽道』について

韓 泰 植

『遊心安楽道』が浄土教学者達に広く知られるようになったのは、十一世紀の頃と思われる。本書を初めて引用して

る人は恐らく源隆国であろう。即ち源隆国（一〇〇四—一〇六六）の著作として知られている『安養集』に「遊心安楽道元暁云」という長文が十回も引用されているのが確認されている。本書についての目録には『正倉院文書』や『義天目録』、『東域伝灯目録』などにも記されており、鎌倉時代になって編纂された覚明房長西（一一八四—？）の『長西録』に初めて載せられているのである。したがって本書が日本で注目されたのは、十一世紀の頃からであり、法然上人の如きも、『選択集』の中に本書を引用しているのである。

その後、本書についての関心が深かった高山寺の明恵（一一七三—一二三三）は本書の註釈書として『光明真言土砂勸信記』などを著述しており、また『高山寺聖教目録』にも記し

ている。なお、凝然（一二四〇—一三二二）の著述目録である『凝然国師著述目録』^①によれば、『遊心安楽道科文』一卷を著述したと記載されているが、残念ながら、現存しないのである。

その後には、あまり『遊心安楽道』に関する書がみられず、江戸時代の浄国寺の義海（？—一七五五）が著述した『遊心安楽道私記』二巻が唯一の註釈書として現存している。

ところで、義海の『遊心安楽道私記』の序文によれば、
（浄全統巻七）

唯其書、文字訛脱甚多。殆乎不可通曉。而未獲善本。聞宗要。以稍善於此。乃就而按之。或推其義而正之。遂乃略科釈其文義。私為之記。以便蒙學。豈敢謂解拘攣。破盲瞶乎。

と述べている。即ち、義海が底本として参考していた『遊心安楽道』は、誤字・脱字などが甚だしく、殆んど通曉することができなかつたのであり、しかも、いまだ善本を獲ることができなかつたので、元暁の『無量寿経宗要』を閲覧して対

照し、校正しながら、その文義を推定しなければならなかったと慨嘆している。

したがって、義海が『遊心安楽道私記』を著述する江戸中期の寛延二年（一七四九）の頃には、すでに善本を獲ることができなくなり、止むなく訛脱が甚だしい唯一本を底本として『遊心安楽道私記』を著述したと述べているのである。

しかれば、義海が底本として参考した『遊心安楽道』の原本は、如何なる本であったのであろうか。これについては、現在に『大正新修大藏経』及び『浄土宗全書』の底本となっている明暦四年（一六五八）刊、比丘大可校、西村九良右衛門板があるのである（以下は「明暦本」と略称する）。この「明暦本」の出版年度も義海の『遊心安楽道私記』著述より九一年先のことであり、また、義海が慨嘆しているように誤字・脱字・倒錯などが多くあるので、恐らく義海が底本として参考した原本は「明暦本」であらう。

「明暦本」は義海が『遊心安楽道私記』を著述する時、ただ唯一本として流通されていたので、義海はほかの善本を獲ることができなかったものと考えられる。したがって、その後の明治年間になってもほかの善本がなかったようである。ところで、「大正新修大藏経本」の対校に使われた「大谷大學蔵金陵刻本」は中国版であるが、これは楊文会が中国に伝を夙った仏書を日本から鬼集し、古逸浄土十書の一つとして

明治末年に復刻したものである。よってこれも「明暦本」を底本にしたものと推定するのである。

この「明暦四年版本」にも現在までの調査によれば、二種がある。一つは、本文だけがある書と、もう一つは本文の上段に「註釈」が付けられている書が最近に発見されたからであるが、この両書の内容においてはまったく同じであり、書体も同一であるけれども、ただ、本文において脱字部分の上段の五ヶ所に「註」が付いている。この「註」の書体は本文と異なっているので、恐らく「明暦四年本」が出刊された以降、誰れかが、脱字部分に対して補註を付けたものと思われる。このように江戸期より善本を求める努力が続けられたが、いまだ「明暦本」以外にはその労は報われていなかったのである。

二

然れば、なぜ、義海以降の浄土教家達は「明暦本」以外の『遊心安楽道』の善本を獲るために努力していたのであろうか、これについては善本がなければ、解決できない問題点があったからであり、これを要約すれば、次のようである。

①すでに義海の『遊心安楽道私記』でも指摘しているように「明暦本」には誤字・脱字・倒錯などが多くあるので、内容上において意味が通じない部分がある。そして、本書に

述べている浄土思想を正確に理解することができないのである。特に本書の構成について考察するに、本書の特性としては、ある一人の浄土家によって個人的な浄土思想が展開されているのではなく、数人の先代の浄土家達による浄土思想を綜合して紹介しながら、その中に、撰者の見解を明らかにしているために、ただ、一字の誤字や脱字があっても重要な問題点がこのわけである。

② また本書を分析すれば、本文の構成は三つの部分から成り立っている。一つは本書の内容と連関性ある他論疏の文句である。即ち、本書は元暁の『無量寿経宗要』と、迦才の『浄土論』、懐感の『群疑論』などとの関連性が深いのである。二つは、経文の引用である。即ち、経文の引用としては『無量寿経』、『観無量寿経』、『大宝積経発勝志楽会』、『不空羂索神変真言経』などが引かれている。三つは、撰述者の見解である。この部分は全体においてきわめて少ない文章であるが、しかし本書の内容を把握するためにはもっと注目すべきところである。

以上のようにして本書が構成されており、その中の経文引用の部分は別に問題点がないといえる。ところで、「明暦本」のように誤字、脱字があると、論疏との関連性ある部分や撰述者の見解が出るところでは正確に内容を理解しなくては多くの疑問点がこのころである。特に論疏の関連文の部分にお

いては、そのままの引用ではなく、撰者の見解が挿入及び要約などがあるので、「明暦本」だけではそのような疑問点を解決することができないわけである。

③ なお、元暁の入寂年代が正確に知られていなかった最近までは本書が元暁の浄土思想を代表する著述として重視された。しかし、一九一四年に元暁の碑文の下半部が慶州で発見され、師の入寂年代が六八六年であることが明らかになってからは、本書が元暁の真撰であるか否かについて疑問が出されるようになった。その理由として元暁の入寂より約二十年後に菩提流志によって訳された『大宝積経発勝志楽会』と『不空羂索神変真言経』が引用されているからである。したがって、本書の撰述者及び撰述場所などについて疑いが起されるようになり、これについては諸学者達の間にも種々な説がある。

以上のように、いまだ唯一本と知られている「明暦本」は誤字・脱字などが甚だしいので、本書の研究においての多くの難しい点があった。したがって、本書の研究を進めるためには正確な校訂本が要望されていたけれども、これもまた「明暦本」だけでは研究を進めることができなかったのである。

三

ところで、年前に京都市左京区大原来迎院町に所在してい

る来迎院という寺院の「如来蔵」と呼ばれる書庫から良忍の手扱本とみられる『遊心安楽道』が発見されたのであった。これについてはすでに文化庁の調査によって学界に報告されている。『来迎院如来蔵聖教目録』と融通念仏宗教学研究所編の『良忍上人の研究』に明らかにされている。これによれば、来迎院の如来蔵に発見された資料は総五三九種であり、法・報・応の三函に分類されているのであるが、本書はこの三函の中の第一箱である法函の七六種の書物の中の良忍自筆及び手扱類十五部に含まれている。これによって、来迎院から発見された『遊心安楽道』（以下「来迎院本」と略称する）について詳しく紹介するならば、次の如くである。

『遊心安楽道』良忍手扱本

縦二六・〇、第二紙長五〇・五、三十一紙卷子装・表紙茶地楮紙

・料紙黄楮紙・墨界

「外題」遊心安楽道

「尾頭」遊心安楽道、一卷

「本文」一行十五—十八字、一紙二十七行、無点、校合加筆

「奥書」一校了

「印記」各紙紙背継目存下ニ黒方印「雄」各一類

「時代」平安後期

。包紙表書「遊心安楽道」

新羅國
元曉撰

良忍上人之本

と報告されている。これは巻き物として楷書で書写されてい

る。表には「良忍上人之本」と記されているが、奥書がなく、筆写者についても触れられていないのである。ところで、これと同一函に含まれている浄土関係書である『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽浄土義』について、筆写者が「葉源」と明らかにされている。また、『遊心安楽道』の著者について本文では「元曉撰」という記録がないが、包紙の表書に「遊心安楽道新羅國元曉撰良忍上人本文」と記載されている。この包紙は本文の巻き物とは紙質が異なっており、この包紙の紙質については専門家の鑑定によれば、江戸時代の紙であると推定されている。

したがって、文化庁の報告によれば、「来迎院靈宝古筆目録」裏に享保十六年二月の善逝院咸開の識語」という記録があるので、これは江戸時代の享保十六（一七三二）二月、良忍上人の六百年忌に当り、法孫である善逝院咸開が第一箱の法函を収めたものと判明されている。そして『遊心安楽道』の巻き物の包紙もその時のものであらうと推定している。そうであるならば、義海が『遊心安楽道私記』を著述した年が寛延二年（一七四九）であるから、これは義海の著述より十八年も前のことであり、恐らく義海は良忍のこの善本をみなかったものと思われる。前にも述べたように義海は底本の訛脱が甚だ多かったので、善本を求めたるも、善本を獲ることもできなかったと記載しており、義海が底本としていたの

は、「明暦本」であったようであるから、もし、義海が「来迎院本」をみつけていたならば、恐らく参考したはずであるが、義海の『遊心安楽道私記』にはこのようなことは一つも触れていないのである。

四

然らば、「来迎院本」の『遊心安楽道』はいったい何時のものであるうか、前記の目録で記しているように本書は良忍の筆写本ではなく、手択本であると認められている。良忍の生涯の中でも浄土教に関心を持っていたのは、二三才（一〇九五）の時に大原に隠遁してからである。その時の浄土に関する書としては『讚阿弥陀仏偈』、『略論安楽浄土義』、『遊心安楽道』の手択本があり、上の二書については、筆写年度と筆写者に関して明らかにされているのである。即ち、筆写者は薬源であり、筆写年度は康和元年と康和二年として記録されているが、『遊心安楽道』については筆写者と年代が記載されていないので、確かなことは不明であるけれども、上記の両書が良忍の二七才と二八才の時のものであるから、恐らく『遊心安楽道』もこの両書と共に良忍の浄土教に対する関心が高まった時の以前頃のものと推定されるのである。

もし、「来迎院本」の『遊心安楽道』が康和年間（一〇九五—一一〇五）以前のものであるならば、前項で述べた通り、

源隆国（一〇〇四—一〇六六）の『安養集』に引用されている『遊心安楽道』とはあまり、年代的な隔りがないし、また長西（一一八四—？）の『長西録』とも年代的な隔りがありなないので、十一世紀の頃、日本で『遊心安楽道』が愛読される時に「来迎院本」が流通されたものと推定することができるとは、したがって、源隆国が引用した『遊心安楽道』を良忍も入手して愛読し、長西は『長西目録』にこれを記録し、法然上人も『撰択集』にこれを引用したのではないかと推定するのである。

しかし、その後、「明暦本」が開板されるまでの約五六〇年間の長い時間に多くの人々の手によって筆写されるうちに、誤字・脱字、倒錯などが甚だしく多くなったものと考えられる。このように「来迎院本」は「明暦本」より約五六〇年を遡るのであるから、「明暦本」と対照することによって今までの「明暦本」のみによっては解決することができなかつた多くの疑問点が解けるようになるものと期待している。特にこのような研究がすすめられるならば、『遊心安楽道』の校訂本も可能であろう。このたびの、本稿では「来迎院本」の発見と資料的な価値についてのみ述べさせて頂く次第である。

（註は省略する）

△キーワード▽ 『遊心安楽道』、『明暦四年本』、『来迎院本』

（東国大学校専任講師）